《海外研究室事情(19)》

Department of Astronomy, Seoul National University

ソウル国立大學校・自然科学大学・天文学教室

http://astro.snu.ac.kr/eng/index.html

「ソウル大学の学生は良いですね。」韓国を訪れてセミナーをした方からよく聞く言葉です．もちろん私が韓国にしばしば訪れていることを知っているからのことだと思います．確かに韓国の学生はよく勉強しており，これは大学に入学後も成績の悪い学生が放校されることと関係があるでしょう．また大学院生の授業も，日本の大学と比較すると，信じられないほど充実しています．

私がソウル大學校に滞在したのは平成7年9月から平成8年の3月までの約半年間で，客員教員として大学院生に対して週に1コマの授業を行いました．当時のソウル大學校には観測装置を扱う教員がいなかったことと，後で紹介する共同研究の関係もあり客員のポストを用意していただき，観測的天文学と観測装置の講義を担当しました．学生達は私のつたない講義に対しても随分と積極的に質問をぶつけてくることが普通で，おかげで授業の雰囲気を実に盛り上げてくれました．その期間中に，私の講義を受けている学生とともがらに飲みに行く機会もあり，学生の話を聞く機会にも恵まれましたが，本当に勉強熱心だというのが印象として心に残っています．ちなみに向こうでは儒教の影響だと思いますが，学生と教員が連れ立って飲みに行く機会はあまり多くなく，学生は学生だけで，教員は教員だけで飲みに行く機会が多いようでした．特に天文学教室の教員はお酒と美味しいもの好きの方が多く，週に一回は総出(日本ではなかなか無いことと思いますが)での酒席の宴があり，私にとっては実に居心地の良い環境でした．まさにアットホームな人間関係で，ソウル大學校の皆さんとは現在でも家族ぐるみの付き合いを続けています．これだけの数の教員が，夫々なんと週に9コマ程度の講義を展開していますので，その授業の充実ぶりたるや想像に難くないと思います．ただしその授業をこなしている教員の方は，非常に重たいデューティーを抱えているわけで，学期中に観測出張に出かけることもままならないというのが現実です．天文学を専門分野とする教員数は，天文学教室に9名，教養学部に1名で，その方達の研究分野を順不同に列挙しますと，Solar-A（ようこう）との共同研究に基づく太陽物理学，ダストの散乱問題を中心とした星

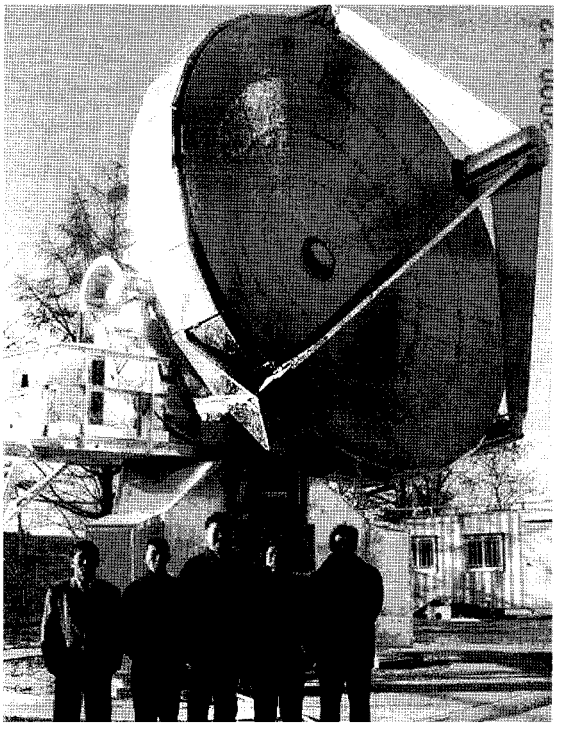

図1　昨秋ソウル大學校キャンパス内に完成した電波望遠鏡
(写真提供　Koo, Bon-Chul 氏)

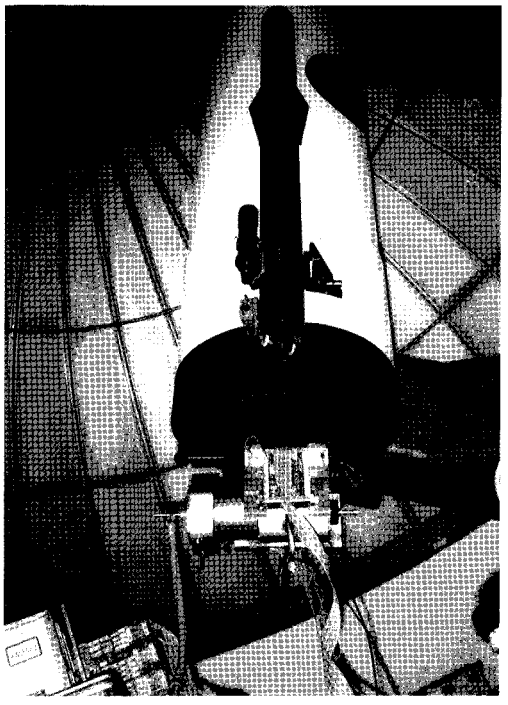

図2　ソウル大學校キャンパス内天文台の 60cm 望遠鏡に搭載された PtSi 赤外線カメラ

間塵および黄道光に関する研究，電波望遠鏡の開発（図1）と電波天文学，ハッブル宇宙望遠鏡による球状星団の観測的研究，赤外線カメラによる観測と赤外線天文学，SPH による宇宙論的シミュレーション，フォッカープランク法による星団系のシミュレーション的研究，と非常に多岐に及んでいます．教員のすべてが海外で長期のポスドク経験を持ち，欧米の研究者とは現在でも密接な関係を持っているようです．この結果，海外の望遠鏡やハッブル宇宙望遠鏡のマシンタイムを利用した観測が盛んです．

現在では様子が変わってきていますが，私が韓国を訪れ始めたころは，大学における天文学分野の研究費は冬の時代が続いており，大学の校費に相当する部分は日本におけるそれよりも充実していたものの，大学での観測装置開発などは容易で無いという状況でした．私が客員でソウル大學校に行く前々年に採択された，赤外線カメラの開発（図2）に関する国際共同研究の科学研究費が韓国の天文学分野で最初に採択された予算であると聞いています．この主要メンバーであり，こちらで実用化を行っていた赤外線検出器を用いることが前提であったことから，韓国にしばしば訪れる機会を得，その後の客員教員の話へと進みました．

最近でも近くて遠い国という形容がなされることがありますが，滞在期間中に感じたことは，やはり心情的に近い国であるということです．過去の問題は無いわけではありませんが，個人レベルの人間関係においてハードルとなることは少ないようです．また文化的精神的なバックグラウンドはやはり重なる部分が多く，会話をしていて言外のニュアンスのやりとりは，他のどこの国に行ったときにも感じることのできない深みを持っています．また滞在期間中には三国時代の百済や新羅の遺跡を訪ねる機会もありました．しかしその度に感じたことは，それらの（特に百済の）形見の多くがどちらに多く残されているかを考えさせられるものでした．また天文学教室の Hong, S.S. 先生とは『くだら』の語源（ハングル読みでも日本読みでもない音）について，しばしば議論を行い文献の調査も行いましたが，残念ながら客観的に説得力を持つ理解には到達しませんでした．しかし我々の間では合意する結論を得ました（ここでは触れません）．私としては極めて楽しい滞在であったことは間違いないでしょう．特に最近ではソウル大學校側に外国人ポスドクの席を確保しているそうなので，我と思わん人は是非応募してみるべきであると思います．

最後になりましたが，我々 ASTRO-F チームはソウル大學校天文学教室を中心とした韓国の研究者と協力関係を結び，現在ソウル大學校の1名の教員と2名の大学院生が宇宙研に滞在しながら，遠赤外線観測のシミュレーションおよびデータ解析の準備を進めています．将来には我々と同様に ASTRO-F の観測にも参加し，大きな寄与をもたらすものと期待されています．

上野宗孝（東京大学大学院総合文化研究科）